

千代田区における教育医療福祉の連携にもとづくヤングケアラー支援体制構築に向けた実態調査

－ 共立女子大学看護学部地域在宅看護学領域 －

目 的

ヤングケアラーとは、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートを行っている18歳未満の子ども」を指す。子どもが家族のケアに参加することは、その子どもの成長や家族の絆の強化につながるというポジティブな面も有するが、子どもがケア責任を負わされることにより、友人との交流や学業が阻害されることが問題となっている。

本研究では、千代田区におけるヤングケアラー支援を考える基礎資料を得るため、千代田区立小学校、および中学校、中等教育学校の児童・生徒における家族のケアの実態と、これら学校の教員等による支援の実態を明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。

研究内容

調査1【小学生調査】

千代田区立小学校8校の5年生約500人を対象とし、①普段の生活状況、②家族の世話の状況、③ヤングケアラーの認知と意見、について調査した。調査はWeb調査で行った。(有効回答数：297人)

調査2【中学生・高校生調査】

千代田区立中学校2校の2年生と千代田区立中等教育学校前期課程2年生、同後期課程5年生の約560人を対象とし、①普段の生活状況、②家族の世話の状況、③ヤングケアラーの認知と意見、について調査した。調査はWeb調査で行った。(有効回答数：228人)

調査3【教員調査】

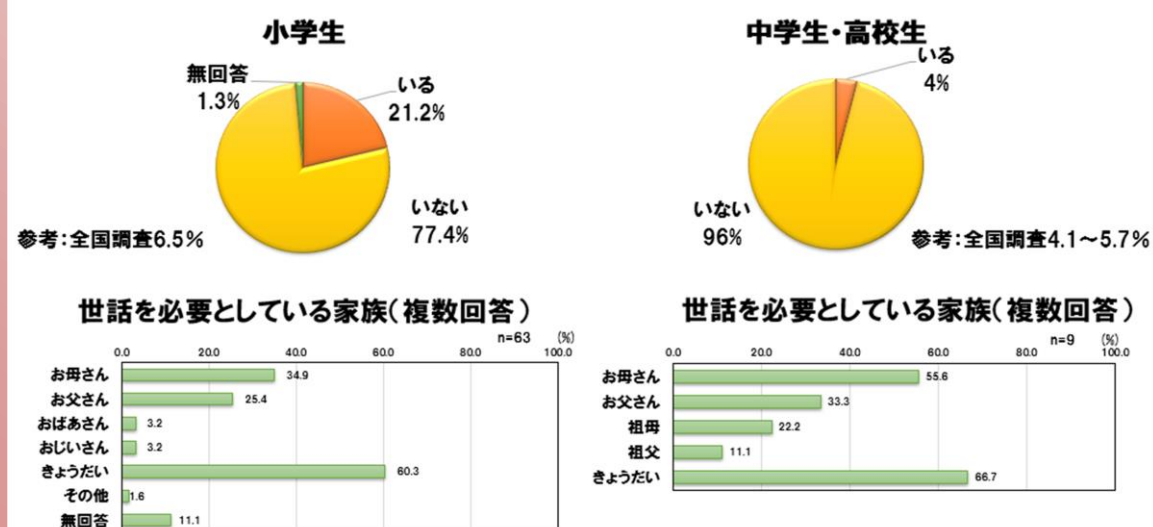
千代田区立小学校8校、千代田区立中学校2校と千代田区立中等教育学校の教員並びにスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、計約330人を対象とし、①認知したヤングケアラーの状態、②ヤングケアラー支援の連携先機関の知識・認知、について調査した。調査はWeb調査で行った。(有効回答数：111人)

調査4【ケアに対する意識調査】

調査1～3の全対象者を対象に、ケアに対する意識を調査した。調査はWeb調査で、調査1～3と一体的に行った。

結果

家族に対して大人が行うようなお世話をしているか？



世話の相手は「きょうだい」が最も多いが、小学生、中学生、高校生ともに、全国調査に比べて、「母親」、「父親」の割合が高いのが特徴。

教員の考えるヤングケアラー支援のため必要なこと

	小学校 (n=62)	中学・高校 (n=49)
子ども自身がヤングケアラーについて知る	75.8%	81.6%
教職員がヤングケアラーについて知る	66.1%	61.2%
子どもが教員に相談しやすい関係づくり	61.3%	42.9%
SC・SSWなど専門職の配置の充実	58.1%	53.1%
学校がヤングケアラー支援について相談できる機関があること	41.9%	40.8%
福祉と教育の連携を進めること	53.2%	53.1%



考察・まとめ

- 千代田区の小学5年生では、大人がするような家族の世話を自身が行っていると感じている割合は21.2%と、全国調査に比して顕著に高いことが示された。世話の負担は比較的軽いと考えられるが、核家族が多い特性から、一人で世話をしている割合が高く、中には心身の負担感を訴える者もあり、看過できないケースもあると考えられる。小学生全体として、全国に比較して習い事を行う割合、遅刻や早退をすることがある割合が高く、自由記載からは自由な時間を求める声も認められ、千代田区独自の家庭環境を踏まえた支援の必要性が示唆される。
- 千代田区の中学2年生・中等教育学校前期課程2年生、並びに後期課程5年生では、大人がするような家族の世話を自身が行っていると感じている割合は、それぞれ5.6%、1.9%であり、全国に比して同等～低い割合であった。
- 「ヤングケアラー」概念の認知度は、教員、中学生、高校生では高かったが、小学生では低く、また、教員、中学生、高校生と比較し、家族の世話を引き受けることを無条件により行いと捉える傾向があることから、「ヤングケアラー」概念の普及啓発を行い、自ら支援を求められるようにしていくことが重要と考えられる。全国に比較し、スクールソーシャルワーカーがよく機能していることが示唆されたが、より相談しやすい環境を整えていくことも必要と考えられる。
- 教員が支援をおこなっていく上で、教育と福祉の連携の重要性も指摘されていたが、連携先となる外部機関や、福祉制度についての認知度は十分ではないことが示唆されており、より分かりやすい情報提供と、教育と福祉をつなぐ体制の強化も求められる。